

HPLCのプレ及びポストカラム 誘導体化からFIAへ

九州大学薬学部 大倉洋甫

FIA研究懇談会の委員代表 石橋信彦先生の御急逝によるショックから四ヶ月に成る。先生の本会運営への情熱と実績、Flow Analysis V国際会議への偉大な貢献などがしみじみと思い起こされる昨今である。

1991年11月23日、日本分析化学会第40年会の折りに開かれた本懇談会の委員会において、しばらくの間の後任を私が勤めさせていただくことになった。FIAの経験が浅く、数報のFIA関連論文しかない私には委員代表は荷の重い仕事である。

もとより委員代表に適任の方は多い。しかし、本会の事務局が九州大学工学部応用物質化学科機能物質化学コースに存在し、その事務機能を急に他所に移すことも困難なことなどもあって、連絡に便利なところに勤務する私がピンチヒッターをお引受けすることになったのである。献身的に本会の実務をいただいている事務局の今任稔彦先生はじめ多くの方々には引続きご苦勞をおかけすることになるが、何分宜しくお願い申し上げたい。また本会の運営に関し、会員諸氏の御提案、御批判を歓迎するとともに、御協力を賜りたい。

私どもはポスト及びプレカラム誘導体化HPLCを主要武器の一つとして研究している。その誘導体化の部分はFIAと同じ連続流れ分析である。これらの方法ではともに何らかの試薬機能を有するものが必要であり、検出装置も同じものが両方法に共用できる。FIAに多種物質の分離機能を加えればポストまたはプレカラム誘導体化HPLCと本質的に変わることはない。試料の前処理もカラムスイッチングの手法で行えばFIAそのものである。

これらの方法をFIAと見るか、HPLCとみるかは、各研究者の研究の流れと主観によるのみである。FIAの論文に、ときに「カラム分離FIA」なる語句が見出せるのもこのためであろう。

FIA側の研究者が開発した優れた方法のうち、HPLCの方々が誘導体化に活用すべきものは沢山あると思う。その逆も真であろう。お互いに輸血し合って多少の改革進歩をすることができると信じる。その情報提供の場の一つが本誌であることを望む。

現在、当研究懇談会の会員数はそれ程伸びていないようである。FIAとHPLCとの情報交換の進展によるメリットを広く理解していただき、HPLCに関与する研究者、技術者が当会に参加されることを願っている。発会の初心にかえって会員拡充の努力を改めてしていただき、当会の足腰をより強力にしたいものである。